

# SONG OF THE EARTH

地球上に生物が発生したのは30数億年前。人類の歴史は原人を含めても、たかだか300万年にすぎない。この人類が今、ガン細胞のごとく地球を食いつくしつつある。人口の爆発的増加と環境破壊。この破壊は化石燃料の本格的な使用が始まる産業革命以後の250年間、特に、第二次世界大戦後の50年間に行われた。人類の歴史からみても、この50年など一瞬の間にすぎない。そして今も、破壊と汚染は速度を増し、全地球的規模で進行している。ガンは寄生する動物が死ぬとき、己も死に絶える。人類は、地球を破壊しつくしたとき、滅亡する。たしかに、人類の歴史は破壊の歴史であった。人類は、自然を破壊しなければ生きていけない不自然な動物である。自然の克服こそ人類の永遠の課題であるかのように。同時に、人類は自然に対する怖れも持っていた。自然に敵対しつつ、自然との共存をはかろうとする謙虚さも持ち合わせていたはずだ。

それがどうだろう。戦争を契機に発達を遂げた科学を万能であると錯覚した人類は、この畏怖心すらも捨ててしまった。毎日の生活と、ごく身近な周辺に対する関心だけに生きるように人類は慣らされてしまったのか。石油の枯渇や、環境悪化についての、充分すぎる情報を得ても、それは将来の問題であり、遠くでおこっている問題として真剣な関心の対象になりえない。環境の破壊を騒ぐ一方で、経済の停滞を嘆く。両者が相いれない関係にあるのを、充分承知していながら。破壊が進めば、必ず到来する危機の兆候が見えているのに、人類は、見ぬふりをして行動をおこさない。これは人類の奢りではないのか。それとも個の滅亡があるように、種としての人類の滅亡もありうることを、人類は、歴史から無意識のうちに学んで諦観しているのだろうか。あるいは、個としての各人が、自分の子孫だけは無事に生きのびると、楽観しているのだろうか。

自然の回復力を上回る破壊が拡がっている。酸性雨による森と湖の死、オゾン層の破壊、二酸化炭素の増大による温暖化、森林破壊による砂漠化と洪水、化学の濫用による毒物汚染、無用な核兵器生産と実験、原発事故による放射能汚染。人類はいつのまにか、消費からかけ離れた、生産性だけを追求する身勝手な価値観を作り上げてしまった。生産性を高めることによって達する経済の成長こそ人類を「豊か」にしてくれると。「豊かさ」とは、モノを所有することによって人類が感じる快適さ、かっこよさといっていだらう。いいモノを多く持っていれば「豊か」であるという具合に。「豊かさ」は単なる人間対モノ、の関係に置き換えられてしまった。モノとは道具である。人類が求める「豊かさ」は、あれば便利だという程度の道具を集めることなのだろうか。生活を「豊か」にするために、衣食住に対するとめどもない欲望が発生する。生産性重視の思想がこの欲望と結び付き、欲望を過剰に刺激して、欲望を満足させる以上のモノが、ありあまるほど生産される。

石油の多角的な利用に目覚めた人類は、交通手段を一新して石油化学を発達させた。化石燃料の濫用を通じて、先進工業諸国はこのわずか50年の間に、歴史始って以来の物質的繁栄を獲得した。「豊かな」生活を享受することだけが目的の生産と消費を通じて、取り返しがつかないほど自然環境を破壊してしまった。

国内の消費量をはるかに越えるモノを生産する先進工業諸国は、この過剰品の買い手を海外に求める。モノが不足している国々に。発展途上国は、自らの「豊かな」生活を維持するためには、モノを売らねばならない先進国にとって、願ってもないはけ口になりつつある。先進国の経済援助は、潜在的市場を開発するための、鯛を釣るためのエビにすぎないの是一目瞭然だらう。先進国の売り込むモノは、物質まみれの見せ掛けの「豊かさ」に対する羨望そのものだ。売り込むモノの実体は先進国のライフスタイルなのだ。この見せ掛けの「豊かさ」は何よりも、酷しい自然と共存している途上国の人々の精神を破壊する。見せ掛けの「豊かさ」は人間と人間との関係をも破壊する。「豊かさ」は個人主義の名のもとに人類にエゴイズムと閉鎖性を持たらした。モノの所有が増えるのに比例して、扉は閉ざされ堅固になる。

破壊はそれだけに留まらない。開発、貿易の名目で先進国は、さらなる生産に必要な、また「豊かな」生活に必要な天然資源を途上国から自国へ持ち運ぶ。公害に対する規制のゆるい途上国に経済発展を促すためとっては、工場さえ建設する。自国ならば当然問題になる工場で起こす汚染と破壊は、途上国が肩代わりする。先進国の「豊かさ」は、多くの犠牲の上に成り立っている。犠牲になるのは、自然であり、途上国の人なのだから。

子を生き続ける人類は、子供達に少しでもよい環境を残しておく義務があるのではないか。問題に取り組む努力を怠り、先送りして、解決を子供達に委ねるのでは、あまりにも無責任にすぎよう。

今すぐにでも出来ることから始めるべきだろう。どうすべきか。乱暴な言い方だが、消費をセーブする以外に方法はない。大量消費を前提にした経済システムは、大打撃を受け、世界はあの1929年の大恐慌を上回る未曾有の恐慌を経験するだろう。人類は、破滅か生存かの二者択一を迫られているのだから、ツケを清算する勇気を持つべきだ。所有するモノが増せば、増すほど、もっと多くのモノに対する欲望も増大する。それに反比例して精神は貧困化する。単なる道具にすぎないモノは、道具であることを越える作用を人間に及ぼす。精神はモノに取り込まれ、モノを所有することが、人生の目的にとって代わる。人類学者が言うように、消費と蕩尽が、人類の生産活動の根源的動機であるにしても、際限のないモノへの欲望について、もう一度考え直してみるのは無駄ではあるまい。

